

広大な草津川跡地を私たちの手で 新たなまちのシンボルとするために

三つのデザイン手法の導入

景観
デザイン

コミュニティ
デザイン

防災・都市環境
デザイン

【計画理念】
歴史をつくる、人と自然の合作

空間目標

時の流れを見つめる場を提供し、心身が癒され 生きる力が得られる場

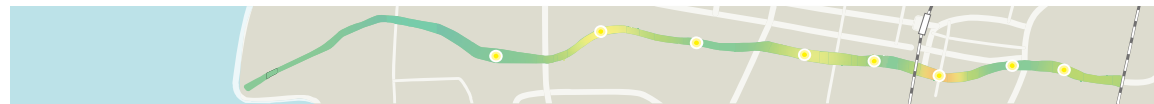
デザインキーワードと空間イメージ

「架かる」…天井川の軽やかなみどり。

市街地より高い草津川跡地を、イメージ的に「まちに架かるみどり」ととらえます。



「楽しむ」…香りを楽しむ。風や鳥の声。食するみどり。



「つなぐ」…多くの市民活動(にぎわいの空間や活動)をつなぐみどり。

にぎわいは市民活動のつながりと考え、その活動をつなぐことを草津川の役割ととらえます。

景観デザインの取り組み

計画理念に基づいて豊かなみどり空間を実現するために、
以下のような景観デザインコンセプトを設定します。

※3 ヒューマンスケール: 人と空間との関係を、人間の身体や体の一部分の大きさを尺度にして考えること。人間の感覚や動きに適合した、適切な空間の規模や物の大きさのこと。
※4 ユニバーサルデザイン: 高齢であることや障害の有無などにかかわらず、すべての人が快適に利用できるような製品や建物、生活空間などをデザインすること。

景観デザインにおけるコンセプト

歴史性の継承

天井川、堤体、街道といった固有の空間特性を意識し、新しい空間化につなげます。



自然との共生

未来に向け「自然と共にいきる」ライフスタイルを目指し、自然環境、草木との一体感などを基本とします。



人間性の尊重

ヒューマンスケール※3、親しみやすさ、ユニバーサルデザイン※4といった要素を重視します。



美しい風景としての菜園や動物とのふれあい牧場など、教育・セラピー・交流の場として活かすイメージ

コミュニティデザインの取り組み

いかに質の高い空間を整備しても、それが使われなくては意味がありません。市民が「ガーデンミュージアム」という空間に愛着を持ち、永く利用され続けるためには、利用する市民がつくる側にも立って、計画策定の段階から参加し、共に空間を育てていくことが重要です。そして、人と人とのつながりの輪、活動の幅が広がれば、さらに様々な形で発展・深化していくことが期待されます。

そのような空間づくりを進めるためには、まずは市民参加のためのコミュニティ形成の場や土台づくりが大切であることから、空間を様々なかたちで共に考え、行動する熱心な担い手を発掘していきます。そこから人のネットワークをたどってコミュニティづくりを促していきます。

このように、市民をはじめとした様々な活動主体のコミュニティづくりを促すことにより、施設の整備だけでなく、計画策定などの過程や整備後の管理・運営、利用を含めた総合的な空間づくりに主体的に関わっていただき、継続的に「ガーデンミュージアム」が利用される仕組みをつくることを、コミュニティデザインとします。

持続可能な協働の取り組みが進められるように、以下のコミュニティデザインのコンセプトを設定します。



コミュニティデザインにおけるコンセプト

公共空間づくりへの市民参加

市民が共に学び、考え、つながりを強める場をつくります。



市民が主役となる行動計画

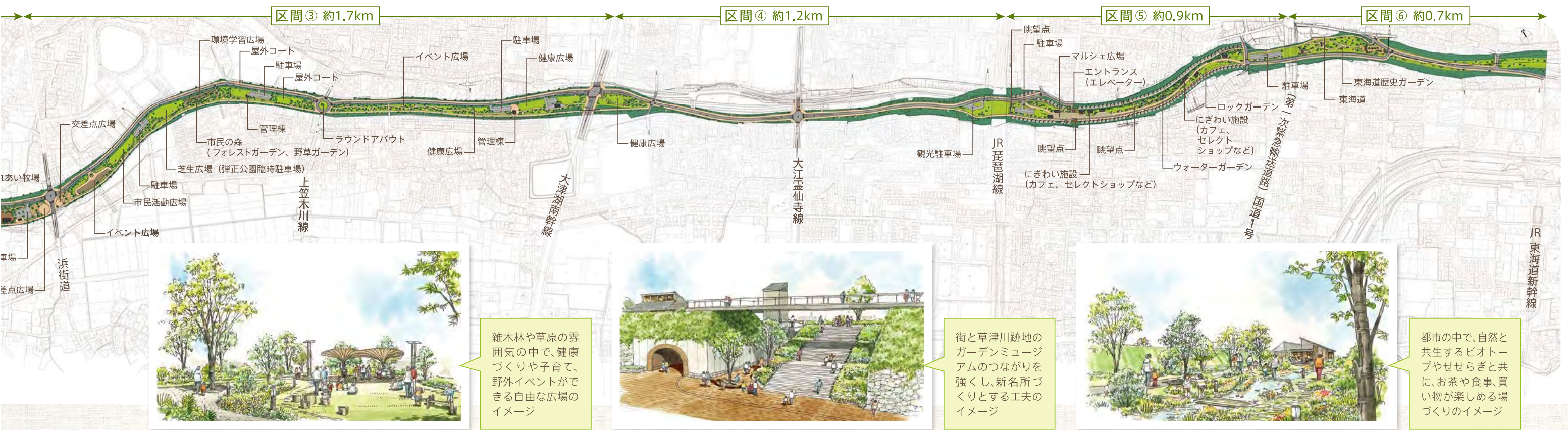
創作、交流の場など、市民の自発的な活動を展開します。



市民と行政の協働による仕組み

多様な主体が連携するエリアマネジメントの仕組みを導入します。





防災・都市環境デザインの取り組み

阪神淡路大震災や東日本大震災における教訓から「なんとしても人命を守る」という考え方を基本にすえて、ハード・ソフト施策を総動員して防災性の高い空間づくりを目指します。

草津川跡地の広大で、連続した空間は、地形そのものが高い防災性を備えたハードといえます。

まず、日頃から多くの人がよく利用する仕組みづくりと共に、日常時の市民活動の中に防災の取り組みというソフトが合わさることで、いざという時に、日々の習慣的な防災意識を思い起こし、自助・共助を可能とする空間づくりを目指します。

草津川跡地

日常時の市民活動の中に防災の取り組み

みどり空間、イベント広場、にぎわい空間

- 市民が日常的に、災害時に役立つ防災施設やオープンスペースを利用することにより、身近に防災に対する意識を普段から醸成します。
- 学校、自治会などで防災教育、防災訓練などで地域防災力を高めます。
- 自助、共助の適切な初動のために、コミュニティを強化します。(コミュニティガーデン・まちづくり活動など)
- 広大な空間・地形そのものによる高い防災性を活かします。

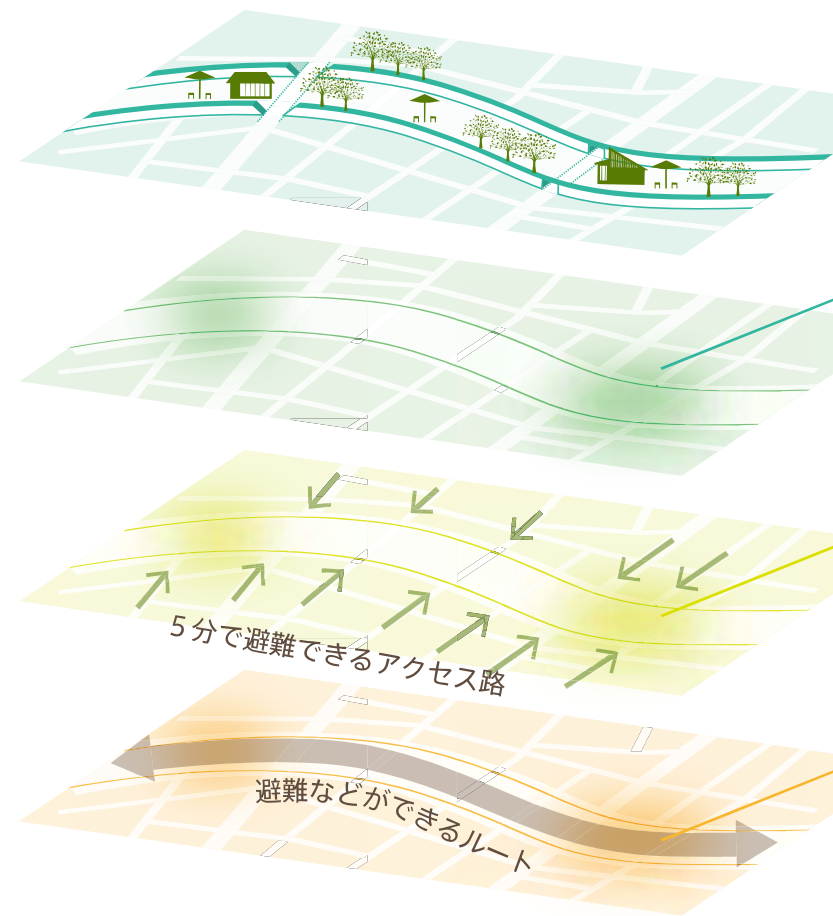
災害時

地形・ハード・ソフト一体となった多重防災機能の発揮
日常時に備えた知識・防災施設を活用します。

災害時の自立した防災拠点(一次避難地的役割・周辺防災施設とのネットワーク)

太陽光発電や井戸水利用などの自然力の利用により、災害時も光や水の利用が可能。

日常のコミュニティの場が、災害時には避難スペースなどに活用できます



●草津川跡地の持つ優位性

地形による視認性の良さ。
誰もが知っている認知度の高さ。
市街地に横たわるアクセス性の良さ。

コミュニティ活動の場

●日常時

コミュニティガーデン活動や自治会活動、趣味やスポーツなどの活動を活かしコミュニティの醸成に努める。

一次避難スペース・情報伝達の場

●災害発生直後

市民の自主防災の段階、生命の確保を第一とした緊急避難の場となる。

避難ルート・応急活動の場

●緊急(3時間以降)・応急対応時

情報収集や安否確認、捜索、救助活動など、災害対応の拠点や広域避難所までの安全な避難路となる。